

オントモ・ヴィレッジ 誌面連動型企画 石田モデル発売記念

音の匠と木の匠の華麗なるコラボレーション

無垢材で作る 究極のハンドメイド スピーカー

対談：石田善之、岸邦明（アクロージュ・ファニチャー）

2016年 Stereo8月号で発表された石田善之氏の自作スピーカー「Sou-2016 Min」が受注生産で発売される。石田氏のこだわりの設計と仕上げを忠実に再現すべく、神楽坂のこだわりの家具工房「アクロージュ・ファニチャー」代表 岸邦明氏と石田氏の度重なる検討により実現した。今回はその「音の匠」と「木の匠」のお二人に無垢材を使用した究極のハンドメイド・スピーカーについて語って頂いた。

文・写真：編集部

——今回の企画の元になったスピーカーはどのような構想で作られたのでしょうか？

石田 今回使用したユニットは口径8cmと小さめだったので、テーブルの上のような、割と近い場所に置く事を想定した、手頃なサイズのデスクトップ型のスピーカーシステムを作ろうと考えました。そもそもユニットそのものがとても綺麗で、エッジの黒と、フレームの艶消しの黒、そして振動板のアルミの色が、見ているだけで楽しくなるようなものです。手元にあった木材のカシミアール・ウォールナットなら、木目も活きてユニットが映えるかなと思って使いました。ユニットの美しさと木の良さを全面に出してみたい、という思いで設計しました。

——エンクロージュアにはレザーも貼られていますね。

石田 バッフルは30mm厚と大変肉厚ですが、内容積をしっかりと取るために側面は板厚12mmのラワン合板にしました。手を伸ばすと届くような場所に置くとすると、スピーカー全体がしっかりと見えるので、格好良く美しく仕上げたかったです。そして、たまに

は感触を楽しんだりもするだろうと思いい、触り心地を考えて皮や天然木を使いました。

——石田先生が作られる作品はいつも仕上げが美しく、高度な技術がふんだんに盛り込まれているのですが、読者の方は、憧れる一方でなかなか同じように作れないという思いもあると思います。今回の「Ishida model」では、そのように個人、またはメーカーではなかなか作れないようなものを販売するというチャレンジもあると思います。実際に商品として製作された岸さんはこのスピーカーをどのように感じられましたか？

岸 まず、この分厚いバッフル板の30mmという無垢の厚みが、音に対してどう関係してくるのだろうと思いましたが、高級なスピーカーでも、ここまで分厚い、しかも無垢材で作られているものは見ないので。

石田 薄いものと厚いものとの違いは結構はつきりとした音の差になって出てくるんです。叩いたときに音が出るという事は、振動板が動いて音が出ているという事です。私たちはその振動板の音だけを聴きたいわけですけど、



家具工房 アクロージュ・ファニチャー
岸 邦明(かし・くにあき)氏
一級家具製作技能士

技術専門学校の木工技術科を卒業。約20ヶ国をモーターホームで巡り、歴史ある国々の生活様式や文化財に触れ、どのような家具を制作していくべきかを学ぶ。新座市に工房を設立後、現在は神楽坂に工房を移し、スピーカー以外にも様々な木工製品の製作に携わっている。木工教室も開講中。

アクロージュ・ファニチャー



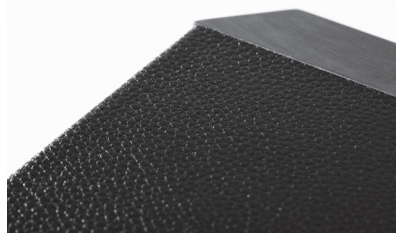
場所：東京都新宿区
築地町6番地 北星ビル2階
営業日：月～土 9時～12時、14時～18時、日・祝祭日 10時～12時、14時～18時
☎ 03-6265-0241
www.acroge-furniture.com

Ishida model ¥100,000 + 税・ペア (送料無料) ※受注生産 予約発売中

パッフルには30mm厚ブラックウォールナット無垢材を使用。側板は15mm厚ワゴン合板に仕様変更。ボディは牛本革が貼られている。「アクロージュ・ファニチャー」により、どこから見ても完全な美しさを表現するよう改良されている。



<spec>
サイズ：140W × 225H × 215D mm、重量：2.0kg、フォステクス製8cmメタルコーンユニットP-800 販売：オントモ・ヴィレッジ ☎ 03-3235-2090
<http://www.ontomovillage.jp>



レザーと無垢材。天然素材どうしによる独特な質感を表現



リア 端子部は裏板とツライチなので、横、後ろからみたフォルムも美しい

岸 ええ。石田さんが製作されたオリジナルのものは、カシミール・ウォールナットが使用されていますが、この木は一般に流通していないため、今回は質感の近いブラックウォールナットを採用しました。ちなみにブラックウォールナットは今買えるものの中では一番銘木と言われているんです。銘木はチーク、カリン、ローズウッドなど色々

——「Ishida model」ではブラックウォールナットの無垢材を使用されていますね。

岸 木が鳴り方を手伝うという点、楽器と同じような考えになりますね。
石田 そうですね、それが音に独特の味わいや特徴をもたらしているかもしれないですね。

そこに何らかの形で余計な音が付帯・付加されてしまいがちです。そこがスピーカーシステムと楽器との違いで、楽器は弦が弾かれた音に対して胴体や全体が響き、ひとつの音になります。スピーカーに関しては言えばエンクロージャにはできるだけ響いて欲しくありません。けれどもどうしても響いてしまうから、それならなるべく良い響きにしたい、というのが市販のスピーカーも含めた一般的な考え方です。
岸 木が鳴り方を手伝うという点、楽器と同じような考えになりますね。
石田 そうですね、それが音に独特の味わいや特徴をもたらしているかもしれないですね。

——仕上げもオリジナルとは若干異なるようですが、具体的にどのような感じなのでしょうか？

岸 無垢材は完全に自然のものなので一つ一つがバラバラなんです。その中から適材を選んでいく作業は手間です。木目が下から上に見えるようにしたり、木目の中心が製品の中央に来るようにするには、板の中で適した場所を選び出さなければなりません。同じ樹木でも位置によって色味もピッチも違ってしまいます。ですから、僕は一つ一つのを作る時には、必ず一つの板から作る事にこだわっています。綺麗に作りたいという欲求が強いので、そういうところを丁寧にやればやるほど、効率を図る事とは反対の作業になってきますね。

石田 そういう意味で無垢材を加工した製品はきわめて贅沢なわけですね。

——無垢材を使用する難しさについて教えてください

岸 無垢材は完全に自然のものなので一つ一つがバラバラなんです。その中から適材を選んでいく作業は手間です。木目が下から上に見えるようにしたり、木目の中心が製品の中央に来るようにするには、板の中で適した場所を選び出さなければなりません。同じ樹木でも位置によって色味もピッチも違ってしまいます。ですから、僕は一つ一つの作る時には、必ず一つの板から作る事にこだわっています。綺麗に作りたいという欲求が強いので、そういうところを丁寧にやればやるほど、効率を図る事とは反対の作業になってきますね。



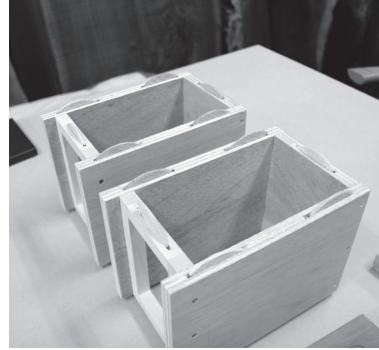
無垢板は、カットする位置によっても木目模様異なる。一番美しく見える中心部のみを使用するため、一枚板から使用できる部分はごくわずか



レザーは本牛革、厚手でフラットのハイ・グレードなものを採用



スピーカーユニットのフレームがツライチになるよう、ざぐってある。これにより、見た目の高級感が増す



フロント、リアの無垢板と天板、サイドの合板の部分の接着をより強固にするため、バスケット型の板を溝に埋め合わせる



レザーの張り具合や位置、パッフルに対しての高さなど、細かな微調整を何度も行なう

岸 一般的な木製品には、木の質が下がった分を塗装で補うようなところがあり、耐久性を高めるといふ意味でも二液性のポリウレタン塗装が主流です。木材を順々に下塗り・上塗りし繰り返し、木に塗膜を付けていき、表面を樹脂塗装したいにします。そうやって表面を膜で覆ってしまうとどんな木材でも感触は同じになります。塗装の技術次第では、全く違う木材をウオールナットに見せることだってできるんです。日本人は、百個作ったら全て同じ色や形にしないでほしい、という意識があるので、納めた時が一番綺麗になるように仕上げる人が多いです。でも、それでは経年変化を楽しむ事はできないし、傷付いたらもう直せません。

石田 そうですね、車と同じですね。岸 ええ。今回のスピーカーでは、表面に塗膜を作るといよりは、内部に塗装を浸透させて、内部で固めているんです。全くの無塗装というわけではないんですが、表面に塗膜が殆どないんですよ。そうすると、触った時に木に触れている状態になります。実際は木の中には塗料が入っているので、水をこぼしても基本的には弾きますし、簡単には中に入っていないんです。

塗膜をつけると、木が本来持っているであろう音が変わってしまうと思うので、浸透させるタイプでありながら、なるべく長く変化がないような塗料を使用しました。

石田 メーカー製のスピーカーは均一に作らなくてはならないという条件があると思いますが、その点、私たちがやっているような手作りや一品作りは、手触りへのこだわりに関して、メーカー製とは方向性が違うという事になるのではないかと思います。

——積層やMDFのように固めたりした材料と、無垢のような単板とはどのような違いがあるのでしょうか？

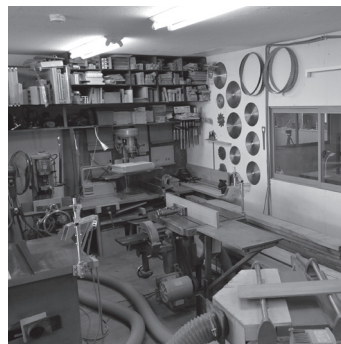
石田 多くのスピーカーの場合、木らしさを出すために表面に突板を貼って表現し、予算的に難しい場合は、プリントしたもので突板風にイミテーション化して仕上げるというのが一般的だと思います。しかし今回のように、表面だけを木らしく見せるのではなく、無垢材をそのまま使いたいと思った気持ちの奥には、それが音の響きの微妙な違いに繋がってくるんじゃないかという期待があったと思うんです。僕も今まで色んな木材を使ってきましたが、やはり固くて重い材料が音的にし

石田善之氏と
無垢材のスピーカーを試聴する会
開催のお知らせ

内容：スピーカー試聴及び石田善之氏による解説
日時：2017年5月26日（金）
18:30～20:00
場所：音楽之友社 視聴室
応募方法：試聴会をご希望の方は、次の①～③のいずれかの方法でお申し込みください。
①メール：village_info@ongakunotomo.co.jp 宛に、お名前、ご連絡先を記入の上メールをお送りください。
②☎03-3235-2090
（受付時間：休日を除く月曜～金曜の10:00～18:00）
③FAX：03-3235-2212（お名前、ご連絡先を記入の上FAXをお送りください。）
※定員10名。応募者多数の場合は抽選となります。
<応募締切> 2017年5月18日（金）まで



Ishida modelの仕上がりを最終チェック。「見た目の美しさや感触も楽しむ、そのこだわりが不思議と音に繋がってくるんです」



アクロージュ：ファニチャーの工房。ここで一つずつ手作りされる。家具だけでなく、スピーカーのオーダーを引き受けることも多い

つくりする気がします。軽くて爪で押すと引っ込んでしまうような杉板や檜は、スピーカーとしてあまり良い印象がないんですね。繊維の持っている強さとか密度の関わりだと思えます。合板で重ねていったものはそれなりに響きをお互いに殺す働きがあるのかもしれないんですけど、どうも音の響きとしての面白さがありません。ましてやMDFのよりに粉碎して接着剤で固めたものは、伸縮しにくい反面、接着剤の音がしてしまふ。そういう事もあって無垢材の魅力を感じています。

岸 なるほど。では石田さんは、無垢材の特徴である伸縮の発生などは抜きにして、制限なく作れる場合は無垢材を使った方が音が良いというイメージがあるんですね？

石田 響きとしてはそういう感じがしています。ただ、大きい木は動きますでしょ？ 木そのものが呼吸してるので、寸法も変わってしまつて、なかなか製品になりにくい。そこを岸さんは上手に均等に作っていらつしやるんだと思うんです。

岸 例えば分子レベルの話になつてくると、木の成分は科学的にいうとあまり変わらないんです。木によって重たい、軽いと言われてますけど、その違

いは密度なんですよ。軽い木は穴が沢山空いていてスポンジのような構造で、空気が沢山あるようなイメージです。極端にいうと発砲スチロールと同じ様な構造です。

石田 発砲スチロールでスピーカーを鳴らすと、音が通り抜けてしまいますよね。

岸 重たい木は固く、ほとんどが木の成分になつてきます。重たくなると水に沈むぐらいのものもあるのですが、それはもうある意味、金属に近づいてくる。音がほとんど逃げずにうまく反射するんですね。同じ形でも固さが変わると相当な音の変化が生まれるんだと感じています。

——「Ishida model」を試聴しましたが、一般的なMDFや合板で組んだようなスピーカーでは感じられなかった深く心地よい響きを感じました。もし、このスピーカーを使われる方にはどのように楽しんで頂きたいですか？

岸 見た目も綺麗に、どこから見ても非がないように計算して作ったので、そこを楽しんで頂きたいです。古来まで遡って、正倉院にあるような天平時代の作品を見ても、まず木自体が良い

素材でその美しさを活かして作られています。素材を大事にするというのは、日本が古来からもっている美意識のひとつだと思えます。僕はそこを大事にしています。「Ishida model」は「観る」事も含めたスピーカーだと思つたので、これが部屋にあるだけで雰囲気や居心地がよく感じる、そういった事に意味を見出して頂ける方にぜひ使って頂きたいです。

石田 僕も、そういう点は岸さんに大賛成です。スピーカーは音さえ良ければいいじゃないっていう人もいますけれど、やっぱり綺麗じゃなきゃだめですよ。例えば自作でも、ベニア板を切りっぱなしで切つて、それで音が出て「さあできた」となりがちですが、そういう事に若干反発の気持ちもあります。見た目の美しさや感触も楽しむ、今回の企画はそれが集約されるんじゃないでしょうか。そのこだわりが不思議と音に繋がってくるんです。天然木で天然の革を貼つて……。そういうこだわりの替同して頂ける方に使つて頂きたいですね。

——本日はありがとうございました。次号では、石田氏宅でご自身の視聴レポートを掲載します。お楽しみに！